

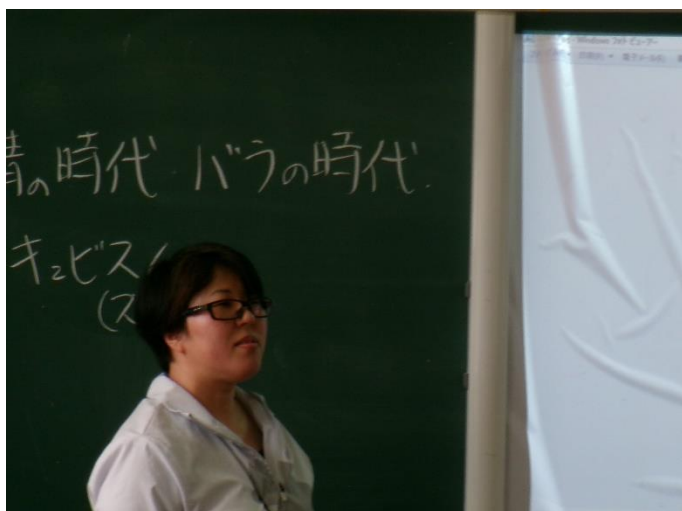
学校探訪レポート

～先生はみんなのパーソナルトレーナー！一人一人に寄り添う授業の工夫を見つけました～

校長 古閑 龍太郎

既成概念にとらわれず、子どもたち自身の自由なものの見方や表現の可能性を豊かに広げる「パーソナルトレーナー」としての先生方の実践に迫る本レポート。今回は、3年1組で行われた古川広子先生の美術科の授業（単元名：「ピカソと絵画の話」）を参観しました。名作「ゲルニカ」の鑑賞を通して作品の意図に迫り、色や形で伝える面白さに気づく、創造性あふれる授業の様子をお届けします！

◆ 多角的なアプローチで迫る「ピカソの世界」と、主体的・協働的な鑑賞の深まり



古川先生の授業は、子どもたちの興味を刺激する見事な美術史へのいざないから始まりました。ピカソの作品や、キュビズムからシュルレアリスムへと至る美術史の変遷を紐解くことで、子どもたちは巨匠の生涯や作品に込められた意図へと自然に想像力を膨らませていきます。

続いて題材となったのは、大作「ゲルニカ」です。まず「何が描かれているか」を個人で次々とワークシートに書き出し、グループや全体でテンポよく共有。さらに「ゲルニ

カとは何か」という本質的な問いに対し、教科書やインターネットを駆使して能動的に調べ深めていきました。対話とリサーチを組み合わせた丁寧なステップにより、作品の背景にあるメッセージを一人一人が自分なりに読み解いていました。

◆ 表現の可能性を広げる気づきと、個の思考に寄り添う温かい伴走

これらの深い鑑賞活動を通じ、子どもたちは「写實的に描くことだけが絵画ではなく、色や形の構成によって様々な思いを伝えられる」という大切な気づきを得ていました。固定観念を崩し、自らの世界を広げていく子どもたちの目は実に生き生きとしていました。

活動中、古川先生は一人一人の手元や調べ学習の様子にじっくりと目を配り、優しく机間指導をされていました。独自の着眼点を持つ生徒を見逃さずに深くうなずき、言葉に詰まる生徒にはそっと寄り添って思考を促すなど、まさに個々の感性を支える「パーソナルトレーナー」そのもののたたずまいでした。この気づきが、次回の「構成的に絵を描く」という表現活動へどう繋がっていくのか、今からとても楽しみです。

◆ おわりに

作品の背景にある意図を能動的に探らせ、色や形が持つ無限のメッセージ性に子どもたちを見事に導いてくださった古川先生。固定観念にとらわれない柔軟な視点を与え、自分らしい表現の楽しさをひらいてくださる日々の授業づくりに、心から感謝いたします。いつも本当にありがとうございます！